



## 狂気という隣人

精神科医の現場報告  
新潮社 1365円

著◎岩波 明

いわなみ あきら

1959年神奈川県生まれ。医学博士。東京大学医学部医学科卒業後、都立松沢病院をはじめ、多くの精神科病棟で診察にあたる。東京大学医学部精神医学教室助教授を経て、現在は、藍野大学医療保健学部教授。本書からは、読書好きな一面もうかがえる

統合失調症は重大な疾患ですが、  
実はありふれた病気でもあるのです



### 触

法精神障害者と呼ばれる人々がいる。犯罪を犯したにもかかわらず、精神疾患（主に統合失調症）を患っていることにより、刑罰を免責された精神障害者のことである。彼らの犯した事件が世の中をにぎわせる一方で、彼らのその後の処遇や、犯罪とは無縁の、「普通の」精神障害者がどのような治療を受け、いかに社会復帰していくのかといったことは、人権上の問題もあってあまり報道されない。

しかし、統合失調症の発症率は10人に1人。この数字に性差も地域差もない。遺伝子の関与が指摘されているが、遺伝病とも言い切れない。いわば、誰もが発症する可能性のある疾患なのだ。「自分とは関係のない、特別な疾患だと思いがちですよね。でも、発症に到らない『潜在的な』患者さんだっています。統合失調症は重大な疾患ですが、実はありふれた病気でもあるのです」。「人間の心に興味があって、精神科医を志した」という著者の岩波さんは、多くの精神科病棟で患者の診察にあたってきた。その経験をもとに、まるで「存在していないもの」のように目を背けられて

きた精神障害者のことを、もっと知ってほしいという思いから生まれたのが、本書である。

「精神科、特に統合失調症にはさまざまな誤解があります。たとえば、つらい状況やシヨッキングなできごとによって罹患する可能性は低い、と僕は考えています。抗精神病薬が有効なことからもわかるように、疾患の原因は脳の生物学的異常にあるでしょうね。でも世間では、親子関係などに原因を求め、心因論的な解釈がなされがちです。また、発症後の予後がいいということもあまり知られていません。社会復帰して、普通に仕事をしている方も大勢いらっしゃいますよ」

ほかの病気と同じく、精神疾患も早期発見、早期治療にこしたことはない。しかし、自分が病気であるという認識が本人にないことに加え、周囲も身近に精神障害者の存在を認めたくないことで、病院にかかるのは遅れがちだ。「僕はイギリスとドイツの治療現場を見てきましたが、両国と比べても日本の治療は悪くない。ただ日本の場合、施設にばらつきがありすぎるんです。閉鎖病棟しかない病院もあれば、明るくオープンな病院もある。それに職員の数が少ないのも、問題のひとつです」

### 本

書は「精神疾患と犯罪の関係を」を大きなモチーフとしており、触法精神障害者が犯した「理解不能な」犯罪の数々や、彼らを処遇するための法の不備なども率直に述べられているし、「修羅場」としか言いようのない壮絶な医療現場も赤裸々に語られている。

「手がつけられないほどの興奮状態で担ぎ込まれる患者には5人がかりで抑制を行ない、鎮静薬を打ちますが、患者の体動が激しいため、医師や看護スタッフが注射針が刺さったりすることもあれば、興奮した患者に噛みつかれることもあります。普段は人のいい笑みを浮かべている患者でも、『今、頭で妄想が沸騰しているな』とわかる時があつて、そんなときは私も怖いですね」

その一方で岩波さんは、20年におよぶ臨床の結果、統合失調症は人間の本质と結びついた病ではないか」と思うようになったという。「たとえば夏目漱石の『坊っちゃん』にしても『吾輩は猫である』にしても、漱石が統合失調症だったのではないかと思わせる幻聴のシーンがあります。サリンジャーの作品に登場するシーモア・グラスという人物も、明らかに統合失調症でしょうね。でも、彼らの作品が多くの人の心をとらえていることを思うと、統合失調症は人間の本质とどこかで結びついているのではないかと思わずにはいられません。患者さんを診ていても、なんともいえない親近感を覚えるときがありますしね。精神疾患をめぐる状況には、特にそれが犯罪と結びついた場合、刑罰免責の是非や、一般の精神障害者と触法精神障害者を同じ病棟で治療することの弊害など、多くの課題が山積していることは事実です。しかし、統合失調症だけでなく、うつ病も含めた精神疾患が高い確率で世の中に存在していることを、まずは知ってほしいと思っています」